

アラスカにおける地下資源開発と先住民：石油開発をめぐるグイッチン社会の事例から
井上敏昭
(城西国際大学)

アラスカ州は広大な未開地を有し、開発と環境保全の双方の舞台となってきた。先住民にかかわる法整備は、このふたつのせめぎあいのなかで、その双方と影響を与え合いながら進行した。その結果、アラスカの先住民は合衆国本土とは大きく異なった法的環境を有するに至った。

1980年代に、州の北東部に位置する野生生物保護区域内で石油天然ガス開発が計画され、それに対する承認の是非をめぐって連邦議会で現在も審議されている。保護区に隣接して生活し、開発予定地を繁殖地とするカリブーに依存してきた先住民グイッチンは「開発は伝統的生活を維持する先住民族の権利を脅かすもの」と主張して反対運動を展開してきた。しかし、連邦議会での審議が開発承認に傾く一方、グイッチン社会のなかでも他の地域での石油開発を容認する意見が出始めるなど、事態は流動化しつつある。

本発表では、グイッチンと石油開発をめぐる現在の状況について報告するとともに、この事例の背景にあるアラスカ州の地下資源開発の歴史、先住民の権利および環境保全に関する法的な状況を整理して、問題の所在を明らかにすることを試みる。